

人と違うことを



「学生時代に遊びに行ったパリでは、公園で観光客の似顔絵を描いて生活していました」と松島正樹さん

学は十分に上位校を狙えたが、「人と違うことをやりたい」と父親に訴えた。すると、無口で厳格だった父親は「勉強はできて当たり前。普通に進学するより、何かすごいことをやってみる」と背中を押してくれた。

大学は不合格になったものの、ファッション専門学校在籍しながら、

「芸術系の学校を目指さなかったら、今の自分はいない」と言い切るのは、ファッションデザイナーの松島正樹さん(53、1982年卒)。何でも自分で決断することが求められる学校で、先生には「東海から芸術系の学校に行った人はいない」とだけ言われたが、揺るがなかった。

幼いころから油絵やピアノ、バイオリンなどの芸術に親しんだ。東海中学への進学を目指し、塾に通いながら家庭教師もつけた。「勉強も習い事もやって当たり前」だった。

高校でも好成績で、大

級ブランドが新作を発表するパリ・コレクションにデビューを果たす。「中学や高校で一生懸命勉強したことは決して無駄ではなかった。あきらめずに努力する精神が今につながっている」

社会人のアメリカンフ



「高校時代は自分探しに明け暮れていました」と振り返る藤田智さん

ットボール(アメフト)チーム、富士通フロンティアアイズのヘッドコーチを務める藤田智さん(49、86年卒)は、「自由な反面、自分で決断しなければ置き去りにされる、大学みたいな高校だった」と振り返る。

中高時代は野球部で内野手や投手として汗を流した。家族よりも長い時間をいっしょに過ごした部員とは、今でも頻繁に連絡を取り合う仲だ。

進路についてはなかなか決まらず、何がしたいのか、悩み苦しんでいた。ただ、京都に住んでみたいというあこがれがモチベーションとなり、野球部を引退した高3の夏から、京都大学を目指して必死に勉強した。

そのかいあって、京大文学部に合格。東海で仲が良かったアメフト部のキャプテンのすすめで、京大のアメフト部に入学する。

「日本一になりたい」。入学してからはそれだけを考えて、つらい練習にも耐えた。アメフトに打ち込み、卒業後は京大アメフト部のコーチに起用された。

今のチームに入ったのは2005年。一体感のあるチームを盛り上げ、14年、16年と日本一に導いた。次の目標は、全員が「自分を超えること」だ。(浴野朝香)